

ニッポン・ロングセラー考

「公文式」

SINCE 1958
株式会社公文教育研究会国や文化を超えて学びを提供する、
父親の思いを原点にした学習法

「くもん、いくもん!」。子どもをもつ親でなくとも、一度は耳にしたことがあるだろうこのフレーズ。現在49の国と地域で展開する、株式会社公文教育研究会の「公文式」だ。子ども向けの学習法で、世界における全教科合計学習者数はなんと428万人。一人の父親が息子のためにつくった計算問題教材から生まれた「公文式」が海を越え世界共通語となった背景には、独自に進化させてきた教材や仕組みにあった。

はじまりは息子のための手づくりの学習教材

日本では抜群の知名度を誇る「公文式」こと、公文式学習法。1954(昭和29)年、当時高校の数学教師をしていた公文公(くもん・とおる)氏によって生み出されたもので、問題の解き方を教わるのではなく、自分の力と自分のペースで教材を解き進めていく、自学自習スタイルが大きな特徴だ。

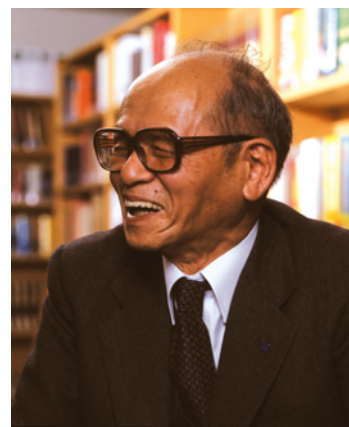
1955(昭和30)年、大阪・守口市に公文式教材を使った初の算数・数学教室を開設。そこから60年経ったいま、「公文式」は世界49の国と地域で展開され、算数・数学、国語、英語など全教科の合計学習者数は428万人に上る。少子高齢化で伸び悩む教育ビジネスにおいて、“KUMON”の名で海を越えて親しまれ、学習者を増やし続ける「公文式」の強みに迫る。

「公文式」の始まりは、創始者・公文公氏が息子・毅さんのために手づくりしたルーズリーフの計算問題教材だ。いつもは得意な算数のテストで、たまたま芳しくない点数をとった息子の答案用紙を見つけた母親からの相談がきっかけだった。高校の数学教師だった公文氏は、計算力がないために多くの高校生が数学の勉強で苦しんでいることを知っていた。そこで、計算力に的を絞り、さらに「子どもが自主的に学習していく姿勢を育てることが教育者の務めである」という自身の考えを反映させ、小学2年生の毅さんが毎日無理なく続けることができるよう工夫された教材を手づくりする。父親がつくった計算問題に毎日30分取り組んだ毅さんは、なんと小学6年生になるころには微分・積分の問題が解けるほどの力をつけていた。

普通の親であれば「うちの子どもはよくできる」で終わるかもしれないが、公文氏は違った。

「自分の息子ができたのだから、ほかの子もたちの役にも立つはずだ」――。そう考えて近

所の子どもたちを集め、同じ手づくりの教材を使った算数・数学教室を開設する。1958(昭和33)年にはもっと多くの子どもたちの可能性を伸ばしたいという思いから大阪数学研究会を創立、1962(昭和37)年には東京都新宿区にも教室を開設するなど、全国的に広がりを見せ始める。



創始者の公文公(くもん・とおる)氏(1914-1995年)。高校の数学教師を長年務めた公文氏は数学教育と同時に、読書教育も大切にしていた。



世界の教室で子どもたちが取り組む教材の原点は、公文公氏が息子のために手づくりした計算問題教材だ。



ヨーロッパ、北米、南米、アジア、アフリカ、オセアニア…49の国と地域で展開する。

「公文式という勉強法で、子ども（の学力）が伸びたらしい」という口コミでじわじわと学習者数を増やしていった「公文式」は、70年代を迎えるころには学習者数1万人を突破する。さらに、1974（昭和49）年にはその名を全国区に知らしめる、ある出来事が起こる。創始者である公文氏自らがその学習法を紐といた初の著書『公文式算数の秘密』（廣済堂出版）のヒットだ。初めて世に紹介された「公文式」の具体的な指導法や学習効果は大きな反響を呼び、問い合わせが殺到、同書が出版された3年後には学習者数は20倍の20万人、5年後にはさらにその倍を超える50万人を突破する。

「公文式」から「KUMON」へ

公文氏の著書『公文式算数の秘密』がベストセラーとなった同年（1974年）、「公文式」は、算数・数学教室をアメリカ・ニューヨークに開設する。海外展開のきっかけは、日本で「公文式」を学んでいた子どもの家庭がニューヨークへ転勤したことだった。現地に教室はないのかと子どもの母親から聞かれた際に、「あなたが向こうで指導者をやってみたらどうか」と提案し、それが実現したのだ。

「公文式」にとって教室で子どもたちをサポートする指導者は、教材同様、重要な役割を果たしている。「公文式」の教材は「スモールステップ」と呼ばれ、やさしい問題から難しい問題へ、無理せず自分の力で進めていけるよう細やかに構成されており、指導者はその教材を子どもたち一人ひとりの習熟度に応じてセッティングし、「ちょうどの学習」をサポートする。そうした学習の積み重ねが子どもたちの「自ら学ぶ力」を引き出すというのが公文式学習法の基本理念であり、教材だけでも指導者だけでも成立しない。逆にいえば、指導者と教材がそろえば、「公文式」は世界のどこでも学ぶことができるのだ。



「公文式」の学びの特徴である「ちょうどの学習」を支える指導者は、重要な存在だ。



“サミトンの奇跡”により、「現地の指導者による、現地の子どもたちが学ぶ公文式教室」が急速に広がっていった。

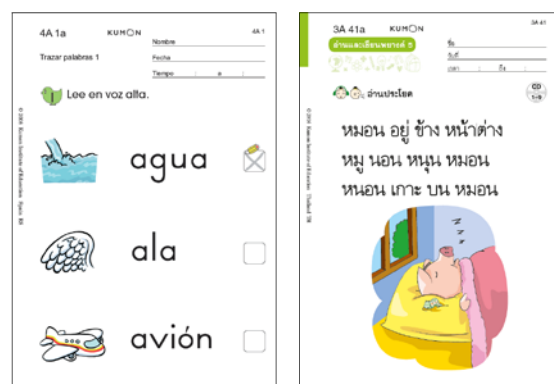
日本人駐在員の子どもたちから始まったニューヨークの算数・数学教室だったが、日本同様「子どもが伸びた」という口コミで、現地の子どもたちへと広がっていった。海の向こうでもまた、「公文式」の広がりを支えたのは「親の声」だった。翌年（1975年）には台湾に教室を開設、1970年代後半から80年代にはブラジル、ドイツ、オーストラリア…と、「公文式」はその輪を広げていく。

とはいえ、すでに100万人を超えていた日本国内の学習者数に比べ、海外はまだ1万人超（1983年）。ところが、1988年、全米に拡大する“事件”が起きた。「公文式」を紹介するテレビ番組を目にしたアメリカ・アラバマ州にある公立小学校サミトン校から「ぜひ授業に

取り入れたい」との申し入れがあり、正課の授業で導入。その結果、公文式の学力診断テストにおける生徒たちの算数の点数が平均して20点アップするという目覚ましい効果を上げたのだ。そのニュースは“サミトンの奇跡”と呼ばれ、すぐに地元のメディアで取り上げられ、そこから『ニューズウィーク』誌、さらに『タイム』誌によって報じられた。海外における「公文式」の知名度は一気に上がり、90年代半ばには学習者数は50万人を超えた。

ニッポン・ロングセラー考 [公文式]

「公文式」で使われる教材(算数・数学)や指導法、自学自習という進め方は、すべて世界共通だ。子どもたちが取り組むプリントは、数学であれば「数学を使って生きていくためには何が必要か」という父親の思いを形にしたもので、子どもに対する親の愛情は国境を超えて共有できる。しかし教材が文科省の学習指導要領に基づいたものであれば、そうはいかないだろう。「公文式」は日本の学習法ではなく、親の愛情を原点としたオリジナルの学習法だということが最大の強みであり、だからこそ「KUMON」として世界の共通語になり得たのだ。



母国語教材として、英語やスペイン語、ポルトガル語、中国語、タイ語なども学習されている。

一方で、日本と海外で大きく違う点がある。それは「公文式」の効果について。日本では「公文式」で「計算が速くなった」「算数・数学ができるようになった」といわれるのに対し、海外では「自立した」「規律を守れるようになった」といわれることが多いという。日本の場合、「公文式」以外にもピアノやスイミング、サッカー…と子どもにとっての選択肢が多いため、個別の効果がみえにくいからか、「公文式」が目指す“学び”の本質は、むしろ海外のほうが理解されているかもしれない。公文式では「数学を学ぶ」ではなく、「数学で学ぶ」のであり、数学を使って新しいことにチャレンジする、数学についての自信を目標の達成や夢の実現に生かす、つまり、「生きる力」を育てることが「公文式」の学びなのだ。

「学ぶ力は、生きる力になる」を伝える

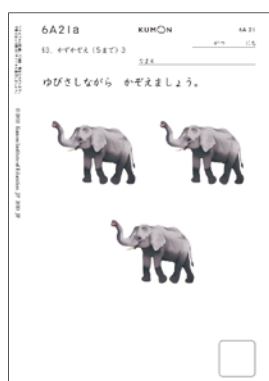
「公文式」の学びは、公文氏による手づくりの計算問題を原型とする教材、その教材を自学自習する生徒、さらに、それを支える指導者の三角関係で成り立っている。公文式教室はフランチャイズ方式で運営されるが、フランチャイズオーナー自身が指導者であることも大きな特徴だ。これは海外も同じで、指導者としての意欲や情熱がなければ教室を運営することはできない。

また、指導者の育成にも独自のこだわりがあり、日本の場合は教室開設から2年間は担当アドバイザーがつき、運営・指導の両面をサポート。その後も様々な講座や研修を単位制で修得していくなど、教室を運営しながら指導者もまた、学び続けていく仕組みになっている。

創始者・公文公氏の思いを形にした教材と、その思いを受け継ぐ指導者。国や文化を問わない独自のメソッドでそれら2つのレベルアップを図り続ける努力が、国内のみならず世界で増え続けている学習者の数に結実しているのだろう。

ロゴにあしらわれた顔は、教室で学び、考え、成長する子どもたちの顔であり、同時に子どもたちと一緒に考える指導者の顔でもある。

ニッポン・ロングセラー考 [公文式]



「公文式」の教材はやさしい問題から難しい問題へ、無理せず自分の力で進めていけるよう「スモールステップ」で構成されている。

公文教育研究会は、公文式学習法の経験者、いわゆる「公文式 OB・OG」インタビューを自社のサイトで掲載している。そこに登場するフリーアナウンサーの久保純子さんや棋士の羽生善治さん、元サッカー日本代表の宮本恒靖さんなどは「公文式」で身につけた「自ら学ぶ力」を「生きる力」へと結びつけた、いわば代表者だ。「学ぶ力は、生きる力になる」。「公文式」という学習法を通して一人でも多くの子どもたちにそのメッセージを伝えること、公文教育研究会の課題はこれまでも、これからも変わらない。

取材協力：株式会社公文教育研究会

<http://www.kumon.ne.jp/>

認知症改善のための「学習療法」

公文教育研究会によるある取り組みが、いま大きな注目を集めている。高齢者を対象にした「学習療法」だ。「音読」と「簡単な計算」で認知症の進行を維持・改善する非薬物療法で、現在、全国約 1600 の高齢者介護施設で導入されている。先ごろの調査(※)では「学習療法」によって、一人あたり年間約 20 万円の介護費用削減効果があることも実証された。

いまから 10 年以上前の 2004 年、子どもの脳の活性化を実証するための研究過程で、公文式学習法が認知症改善に効果的だということ

ことが明らかになり、同社はすぐに「学習療法」の取り組みを本格的にスタート。同社の基盤は子ども向けの教育ビジネスだが、その根底に「公文式メソッドの応用で社会貢献する」という考えがあってこそその判断だ。65 歳以上の高齢者の約 4 人に 1 人が認知症、または認知症予備軍といわれる超高齢化社会を迎えるいま、その対策として大きな期待が寄せられている。

※公文教育研究会による「学習療法・脳の健康教室の社会的・費用対便益調査」より

<http://www.kumon.ne.jp/press/8059/>


「学習療法センター」サイト

<https://www.kumon-lt.co.jp/>


NTT コムウェア株式会社

URL : <http://www.nttcom.co.jp/>

WEB 掲載：2016.10